

〈抄 録〉

拓殖大学と外国語教育

——「拓殖人材」育成を目指して——

浅 井 澄 民

要 旨

2020年、拓殖大学は創立120周年を迎える。この節目の時にあたり、拓殖大学の創立時に関わった桂太郎、後藤新平、新渡戸稲造の足跡と本学との関わりを振り返り、特に彼らが如何に外国語、外国文化と接触したかについて確認し、今後の外国語教育、そして「拓殖人材」育成の糧としていく。

キーワード：外国語教育、拓殖人材、桂太郎、後藤新平、新渡戸稲造

0. はじめに

2020年、拓殖大学は創立120周年を迎える。「故^{ふるき}を温^{たず}ねて新しきを知る」と言うが、この節目の時にあたり、本学が如何に外国語教育を進めてきたのか、特に建学当初に焦点をあて、先学の叡智を学び今後の「拓殖人材」⁽¹⁾ 育成の糧としていきたい。

本稿では特に、所謂「拓大3傑」と言われる桂太郎、後藤新平、新渡戸稲造に注目し、彼らが如何に外国語及び外国文化と接してきたのかまずは確認しておきたい。ここでは、特に各人の、①生い立ちと青年期に目指していたもの、②外国語及び外国文化との接触、③業績とその世界史的意味、④拓大生に対するメッセージ、の4項目について見ていきたい。

1. 桂太郎⁽²⁾

1.1. 桂太郎の生い立ちと青年期に目指していたもの

1848（弘化4）年11月、長州藩萩城下（現・山口県萩市）に長州藩士桂与一右衛門信繁⁽³⁾の長男として生まれた。7歳から13歳まで、私塾で習字と漢文の素読を授かり、その後吉田松陰の親友で、松下村塾⁽⁴⁾を引き継いだ母方の叔父中谷正亮に従って素読の業を継続している。この叔父より当時最新の世界地理書『こんよ ずしき坤輿図識』（箕作省吾著）を示され、幼い頃から西洋への関心、外遊への志を芽生えさせられた。後に桂は叔父を「もと尊王攘夷家にして開国主義を執りたる人」と評しており、その薫陶を受ける。一方13歳から武芸を習い始め、その後父親の勧めもあり幕末の諸戦に参加しつつ、世子毛利元徳の小姓を務めたり、藩校明倫館にも通学している。そして21才で戊辰戦争に従軍する⁽⁵⁾。

1.2. 桂太郎の外国語及び外国文化との接触

1869（明治2）年10月、22歳の時に大村益次郎⁽⁶⁾の勧めで、欧州派遣を目的に横浜語学所⁽⁷⁾へ入学し、仏語を習う⁽⁸⁾。入学に際し、かつて唱えた攘夷論と決別するため断髪脱刀を行っている。翌年4月、横浜語学所は大阪兵学寮に統合され、官費留学が危ぶまれたため、退校を強行し私費留学を決意する⁽⁹⁾。同年8月フランスへの留学に旅立ったが、普仏戦争のためイギリスで足止めされ、9月戦いに勝利したプロイセン（ドイツ）に行き先を変更する。仏語を介して独語を一から学び、軍事学を専攻する⁽¹⁰⁾。ベルリンに3年半いたが、いったん帰国し⁽¹¹⁾、1875年3月ドイツ公使館付武官として再度ドイツに赴く。軍事行政の実務・研究⁽¹²⁾以外に、ベルリン大学で法学・経済学・行政学等の基礎知識を学び、通算7年以上

ドイツに滞在することになる。ドイツ語も流暢になり、それは晩年まで続いた。

1.3. 桂太郎の業績とその世界史的意味

日本の歴代首相のなかで、最長の在任記録を持ち、在任中は日露戦争や韓国併合を行っている。日露戦争の勝利は明治維新以来の不平等条約改正の達成に寄与しただけでなく、非白人国として唯一列強諸国の仲間入りを果たすことになる。またヨーロッパ諸国の植民地であったアジア諸国の独立、革命運動が高まり、中国でも辛亥革命が起きる⁽¹³⁾。辛亥革命前には日清戦争以降増えてきた中国からの留学生はピークに達し、近代化を果たした日本に学ぼうという一大ブームを巻き起こすことになる⁽¹⁴⁾。また当のロシアともその後却って協力関係は深まり、日露協約を締結し同盟状態に近い関係となる。日露戦争の勝利はその後の日本の立場を決定づけるだけでなく、世界に与えた影響は測り知れない。

1.4. 桂太郎の拓大生に対するメッセージ⁽¹⁵⁾

1900（明治 33）年 9 月、台湾協会学校仮開講式にて、初代校長として本校設立の主旨について「彼地（台湾・南清）に於いて公私の事業に従事する有為の才を養成する」とし、入学生に対し「其志望を堅固にして必要なる学問智識を養成すると同時に極めて其体格を壮健にするの心掛なかるべからず」そして、「本校の生徒は卒業後直ちに彼地に於いて殊に内地と異なりて外人の間に立ちて日本人として従事する以上は一は以て我邦の紳士として我校の出身者たる対面を保ちて可恥挙動なき様入校の今日より既に心掛け居らざる可らず彼の華奢の弊風に流ると乱暴の悪習に染まるとは共に大に戒め置く所なり」と述べている。

1911（明治 44）年 4 月、東洋協会専門学校卒業式にて、「校長は非常な繁劇な職務に従事して居る為に、屢々登校を致して生徒に接するの機会も

甚だ少ない、是は校長が遺憾とする所であるが、…其状況は始終能く報告に依り承知して居る次第であります」と前置きし、卒業生に対し「所謂学校は母の胎内に居るものであつて、生まれて初めて人となるのであるから是からは社会に出て、社会の規律の下に立つて自ら身を慎んで将来に身を立つるの方法を最も能く講じなければならぬ場合が来たのである」と述べ、同時に新入生に対し「諸子が茲に校規に服従すること、即ち職員諸子の監督指導の下に立つと云うことは決して人の為でない、将来諸子が一個となって人を使う場合に至っては、必ず之と同じような境遇に来る、己が人に服従することをしなかったならば、人は決して己に服従はしない、是は人に屈するのではない、人の頭に立つと云う即ち素養である」と訓示している。

この二つの告辞は、前者が本学開校時の、後者が桂が亡くなる二年前のものであり、いずれも歴史的告辞といってよい。前者は本学建学の精神と学生の目指すべき将来像を漢文調で述べており、入学生の動機づけが明確に表現されている。後者は学生に対する人生訓を口語調で表しており、卒業生に対しては社会人としての厳しさを、入学生に対しては学生としての心構えを述べたものとする。もしかすると、桂自身が自分の一生を走馬灯のように振り返りつつ表した言葉だったかもしれない。

2. 後藤新平⁽¹⁶⁾

2.1. 後藤新平の生い立ちと青年期に目指していたもの

1857（安政4）年6月、仙台藩水沢城下（現・岩手県奥州市水沢）に、仙台藩士後藤実崇⁽¹⁷⁾の長男として生まれる。11歳の時、水沢城領主留守邦寧の奥小姓として出任し、藩校・立生館に通いつつ、お殿様の側近見習いの道を歩みだす。1969（明治2）年、戊辰戦争の結果、仙台藩は厳しい処分を受け、藩の武士団とその家族は収入と地位を失い、失業状態となっ

た。明治政府は水沢城址に胆沢県庁を開設し直接統治するが、大参事（副知事）の安場保和⁽¹⁸⁾によって後藤は13歳の時、斉藤実⁽¹⁹⁾らとともに県庁の給仕（雑用係）に採用される⁽²⁰⁾。その後も岩倉使節団から帰国した安場が福島県令になると16歳で福島洋学校、17歳で（福島）須賀川医学学校へと進学する⁽²¹⁾。

2.2. 後藤新平の外国語及び外国文化との接触

1876（明治9）年8月、20歳の時、後の愛知医学校（現・名古屋大学医学部）の三等医に採用される⁽²²⁾。ここで後藤は指導者のアルブレヒト・フォン・ローレッツ⁽²³⁾博士に認められ、24歳で学校長兼病院長となる。この間後の初代陸軍軍医総監となる石黒直恵の知遇を得、彼よりドイツ語の習得を勧められている⁽²⁴⁾。その後公衆衛生に造詣が深かったローレッツの影響を受けて、愛知県下の公衆衛生に取り組み、やはり医官としてただ一人、岩倉使節団に参加した内務省衛生局長の長与専斎⁽²⁵⁾に評価される⁽²⁶⁾。1883年26歳で内務省衛生局入りし、中央官庁のキャリア官僚の道を歩みだす⁽²⁷⁾。ここでは内務省のお雇い技師ウィリアム・K・バルトン技師と全国の上下水道の整備に取り組んでいる⁽²⁸⁾。1890年から2年間、自由な立場でドイツに出張留学し、ミュンヘン大学では医学博士も取得し⁽²⁹⁾、帰国後内務省衛生局長に就任する⁽³⁰⁾。

2.3. 後藤新平の業績とその世界史的意味

後藤は台湾民生長官として台湾統治を成功に導き、満州鉄道初代総裁として大連・長春の都市経営を含む事業を軌道に乗せている。これら植民地経営の成功は、日本の統治能力のレベルの高さを世界に認めさせた。その技術的基礎は彼の愛知県時代と内務省時代に培われており、海外の一流技術者に学びつつも、徹底した現地調査を重視する後藤独自の手法といってよい⁽³¹⁾。また、満鉄総裁としては清国・ロシアとの折衝・外交に奔走し

ており⁽³²⁾、これらの経験は後の通信大臣や外務大臣にも活かされたと考えられる。後藤は鉄道の父であり、新幹線の祖父とも言われている。また都市経営の経験は後の東京市長時の都市計画や関東大地震後の帝都復興の責任者として遺憾なく発揮された。

2.4. 後藤新平の拓大生に対するメッセージ⁽³³⁾

1915（大正4）年4月、東洋協会専門学校卒業式に臨み、まずは自らについて「私は変則の変則、諸君の如き斯ういう秩序立った所の教育を受ける幸福を得なかった」と述べ、台湾との関わりについて「台湾阿片政策の為に当時建白したる時の意見が採用せられて桂侯爵と共に台湾に臨んだのであります、其当時は伊藤侯爵が総理大臣であり、又西郷侯爵が海軍大臣として軍艦吉野に搭乗し台湾の施政を視られた其時共に便乗して彼地に参り、以来同地の事に当たったのであります」と述べ、また「この学校の創立について最も力を用いたる人」として児玉源太郎を挙げ、「是は兄弟とも云って宜しいやうな関係を以て桂侯爵と力を協せて此拓殖事業に従事したるものであります」としている。そして本学卒業生の使命として「是は即ち維新の宏謨に基く日本を以て世界の日本と為す、之を第一位とし、而して日本の世界と為すことを第二位とするといふことが我々の世界政策の上に尽くすべき所の大なる職務であるのであります」とし、「恐らくいつでも支配するもの（言葉）は私は平生信ずる、一も人、二も人、三も人、人である、是が桂侯爵が人を養成するといふことに付て植民政策の第一着手としなければならぬといふて苦心経営に成ったものであるといふことを私は信じて疑わぬ」と述べている。

1924（大正13）年4月の恩賜記念館祝典の祭には、第3代学長として「吾々は此大学を徒に其の分量の上に大ならしむるよりも、寧ろ品質の上に善美を尽くさんことを切に希望して居る訳であります」とも述べている。

前者は後藤が初めて本学で述べた歴史的告辞である。二年前（1913年）の第三次桂内閣時には通信大臣として桂を支えていたが、その2月、内閣総辞職し、10月には桂が永眠している。そしてこれから四年後の1919年には本学学長に就任している。まずは自己紹介から始め、桂との出会いの切っ掛けを述べ、それから児玉源太郎に言及しているのが興味深い。児玉が本学の歴史や後藤自身に如何に大きな影響力があったかを窺い知ることができる。また卒業生には「世界の中の日本」という考え方を提示しており、現代では当たり前のグローバル人材に一步先んじたものであると言える。そして「一も人、二も人、三も人」と人材育成の重要性を強調している。後者の告辞は大学経営者としての後藤の考え方が現れているが、現代にも通じる重要なメッセージであると考ええる。

3. 新渡戸稲造⁽³⁴⁾

3.1. 新渡戸稲造の生い立ちと青年期に目指していたもの

1862（文久2）年9月、南部藩盛岡城下（現・岩手県盛岡市）に南部藩士新渡戸十次郎の三男として生まれる。祖父傳は江戸で豪商として材木業で成功し、新渡戸家には西洋で作られたものが多くあり、幼くして西洋への憧れを抱いた。そして藩校・作人館に通う傍ら、新渡戸家掛かり付けの医者から英語を習う。早くに父親を亡くした稲造は9才の時に東京にいた叔父、太田時敏の養子となり、上京後私立の英語学校、旧南部藩の経営する学校で学ぶ。13歳の時、設立されたばかりの東京外国語学校英語科に入学。同校在籍中、15歳で札幌農学校（現・北海道大学）の二期生として入学し、図書館の書物を片はしから読みあさるほど猛勉強する⁽³⁵⁾。

3.2. 新渡戸稲造の外国語及び外国文化との接触

1877（明治10）年9月、札幌農学校に入学早々、ウィリアム・クラ-

ク博士の影響で入信した一期生たちの「伝道」総攻撃にあい、内村鑑三らとともにキリスト教に入信し、宣教師から洗礼を受ける。卒業後、19歳で上級官吏として北海道庁に採用されるが、学究への思い絶ちがたく、創立後間もない東京大学に入学する。しかし、東大での勉強に飽き足らず、中途退学し、1884（明治17）年、26歳で「太平洋の架け橋になりたい」と渡米し、ジョンズ・ホプキンス大学に入学、後に妻となるメアリー・エルキントンと出会う。その後札幌農学校助教授に任命され、官費でドイツへ留学し、ハレ大学より農業経済学の博士号を得る。帰途アメリカでメアリーと結婚し、1891（明治24）年に帰国し、教授として札幌農学校に赴任する。

3.3. 新渡戸稲造の業績とその世界史的意味

国際連盟事務次長を務め、英文で書かれた世界的名著『武士道』はあまりに有名である。第二次大戦中著された『菊と刀』のように、日露戦争後ルーズベルト大統領により、アメリカの陸海軍に教科書として配布されたという。外国語学部所属の我々としては、外国語の達人として最も注目すべき人物の一人である。しかし、後藤新平により台湾統治の経済振興のために招聘されていたという事実はあまり知られていないのではないだろうか⁽³⁶⁾。この実績が評価されその後京都大学で植民政策を講じ、博士論文を仕上げている。またこの時の縁で後に拓殖大学の学監を務めることになる。その他、『修養』⁽³⁷⁾などの著書を表していることも、あまり知られていないのではないのか。実はこの書は筆者が高校生の頃、学友から勧められて一読した経験がある。とても平易な言葉で語られてあり、若者が進むべき人生訓的な内容となっている。教育者としての面目躍如たるものがある⁽³⁸⁾。

3.4. 新渡戸稲造の拓大生に対するメッセージ⁽³⁹⁾

1918（大正7）年3月、東洋協会植民専門学校卒業式にて第2代学監として、「彼是十箇月間殆ど毎週此講堂に於或は歴史談をし、或は修養談をし、或は植民談を試みて概ね吾輩の考の在る所は御推量もあつたろうと思う」と前置きし、卒業生が海外に出る心得として「諸君が殊に海外に出られたならば、…、勿論国家を軽んずるといふことは、是は無いはずである、…、吾輩は十余年間海外に居り、幾度ととなく海外にでるけれども、出る度に国に対する観念は強くなるのみであって、…、国を憶ふの情が一層切なるものがある。」と述べ、更に「吾輩が諸君に望むことは個人として強かれ⁽⁴⁰⁾といふことを言ひたいのである、此点は残念ながら我國民として甚だ弱点であると思う、…、就ては諸君が何処に行かれやうとも自分といふことを重んぜられて、一身の為に国を煩わすやうなことの無いように願ひたい、…、実は之をもう一度具体的に言ふと己を制するといふこと、…、（海外の）風俗習慣の良い所は飽くまでも応ずるが宜し、墮落した風俗習慣に自らを捧げるという必要はない、必要が無いどころではない、排斥するだけの勇気が無ければならぬ」と述べている。

本告辞は新渡戸が本学で行う初めてのものであるが、国際人としての新渡戸の考え方がよく表れていると思う。「愛国心」と「個の強さ」を言ったのであろうが、グローバル時代の現代において、いずれも欠かせない重要要素であると考えられる。

4. 「拓大3傑」に学ぶ——「拓殖人材」育成に向けて

以上「拓大3傑」について見てきた。経歴や立場こそ異なるが、多くの共通点も見出すことができる。ここでは、今一度各人の足跡を振り返り、「拓殖人材」育成の秘訣を探りたい。

4.1. 幕末から明治という時代性

桂と新渡戸は14歳の年の差があるが、三名とも幕末の生まれという共通点がある。特にその出生地は興味深い。長州藩と仙台・盛岡藩といういわば敵味方の関係にある。明治という新しい時代を作った人達に共通する反骨精神、これは中国の孫文や魯迅にも共通する普遍的なものを感じる。新しい国造りを行うという気概、救国の思いは現代の私たちに欠けている最も大切な部分を思い起こさせてくれるような気がする。「拓殖人材」を育成するには、まずは指導者である我々教員にそのような気概があるかどうかが問われているものと考ええる。

グローバル化が進んだ現代は情報革命という新たな歴史段階に入って久しい感がある。時代の節目という意味ではちょうど工業革命を成し遂げた明治と同じで、新たな価値観、時代性というものが要求されている。AIなどIT革命が進む中、ますます真の人間性が問われている。そのような時代認識と同時に新しい時代を作る気概は明治を作った人々に劣ることがあってはならないと考える。地球的規模の創造と破壊という歴史的流れの中でまさに我々は生き抜いていかなければならない。教育者という使命を背負った我々こそがまずは考えなければならない重要課題ではないだろうか。

4.2. 海外留学と外国語

三名とも海外留学を経験しており、特にドイツという共通項が見出せる。これも当時日本が何を目指していたかという一つの証であり、決して偶然ではないと思う。また海外の先進国に学ぶという大命題が底流に流れており、それはかつて日本が中国・朝鮮から学んだ繰り返しに他ならず、日本人に脈々と流れるDNAのようなものだと思う。一方現代はどうだろうか。先進国の仲間入りを果たした日本はどこを向けばいいのだろうか。

我々は一体何のために外国語を勉強しているのか。グローバル化した現代にあって、その意義は明らかに変化している。このあたりも我々教員がしっかりと認識していなければならない大きな課題と言えそうだ。

奇しくも我が外国語学部では2020年4月、新たに国際日本語学科が設立される。これからは、世界のリーダーとして日本が果たすべき役割はますます増大すると考えられる。日本文化のよい部分は自信を持って世界に発信すべく、我々も日々研鑽を積んでいかなければならない。特にアジアにおける隣国との協調は近代からの歴史的課題であり、相互研究と相互理解は不可欠であろう。そして信頼すべきパートナーとして今後歩んでいかなければならないと考える。そのためには特に若い世代の人材育成は最優先すべき課題であり、真の国際人の育成こそが時代から要請された緊急的課題であるに違いない。

4.3. 台湾統治と植民地教育

これは拓殖大学の建学の精神にもかかわる大命題である。桂は第二代台湾総督で初代台湾協会会頭である。後藤は児玉源太郎台湾総督時代の台湾民生長官であり、台湾統治を軌道に乗せた最大の功労者である。新渡戸は後藤より招聘され、台湾の産業育成、糖業振興の実績を持つ。拓殖大学は台湾統治と植民地教育の必要性から生まれた大学であり、この点にぶれがあってはならない。学生達に、本学の歴史を自信をもって伝えられるかどうか、やはり我々教員に問われている命題だと思う。台湾統治の評価はむしろ現地や中国の方が正当に受け止めており、戦後教育の中で育った我々の方が、一歩腰が引けているような気がする。

1907年東洋協会専門学校と名を変えてからは、京城、旅順、大連に分校も設立し、本学卒業生の活躍の場も朝鮮、大陸へと拡大した。日本の影響力も拡大し隣国で活躍できる人材育成が急務となる。戦後、歴史的なマイナスイメージが先行しているが、日本が朝鮮、中国の近代化に果たした

役割は決して小さくないと考えている。少なくともすべてを負の遺産とする考え方からは脱却しなければならない。まずは我々自身がそのことを自覚し、自国の近代史に誇りを持つべきだと考える。そして是々非々の正しい歴史認識が持てるようにしたいと考えている。

4.4. 本学の指導者として

桂は軍人から政治家、後藤は医師から官僚、政治家、新渡戸は研究者、教育者という異なる経歴をもつが、本学の指導者として何を語ったのか、今一度確認しておきたい。桂は1900年9月から1912年9月まで、12年間初代台湾協会学校校長を務めており、その間ほぼ時を同じくして、内閣総理大臣を歴任している。新渡戸は1917年4月から1922年3月までの5年間、第二代学監として、主に植民政策を講じている。後藤は1919年3月より1928年までの約9年間、第3代学長を務め、特に1920年大学昇格に尽力している。詳しくは稿を新たにしたいが、本稿で見ただけでも本学学生に対する真摯な姿勢が窺え、特に卒業後の海外での身の処し方、人間としてどうあるべきかといった内容のものが多し。新渡戸の『修養』や後藤の「一に人、二に人、三に人」のように、如何に「人材育成」を重視していたかということがわかる。一教育者として、また本学教員として我々も見習うべきことが多々あるように思える。

5. おわりに

これまでの調査で、3名共に如何に海外と関わり、外国語を駆使してきたかということが改めて認識できた。彼らにとって海外との関わりや留学経験は飛躍の原点であり、人間修養のための最も大切な所となっていたようである。外国語はあくまで手段、道具であり、より大切なのは人間形成にあることを垣間見ることができる。この点に関しては、現代でも同じこ

と言えるところし、我々も外国語の教員として学生の指導に当たるうえで、心しなければならぬことだと考える。

今回触れられなかったが、本学が建学当初、如何に外国語教育に取り組んで来たのか、稿を新たに振り返ってみたい。

《注》

- (1) 国際的な視野を持ち、国内外の人々と協働して積極的に課題の発見と解決にチャレンジしていくタフな人間力を身につけたグローバル人材。
- (2) 桂太郎については主に千葉功 2012 を参照した。
- (3) 桂家は代々毛利家重臣として仕えており、父信繁も久しく江戸の藩邸に在勤し、晩年には世子毛利元徳の御用所役を務めた。
- (4) 高杉晋作、久坂玄瑞、伊藤博文、山県有朋等を輩出した。松陰の松下村塾は、師弟というよりは「同志者の結合」であり、「兄弟の情」を以て接し、「礼法」を重んじ、「実際の上の学問」「革命の精神」を講じたという；徳富蘇峰 1893 参照。
- (5) 桂は鳥羽・伏見の戦いが終わった時点ですでに外遊の志を抱いており、伊藤博文ら長州の先輩の言に従って外遊を企てたがうまくいかなかった。
- (6) 長州藩の医師、西洋学者、兵学者。日本陸軍の創始者ともいわれる。
- (7) 幕府が創設したものだが、明治新政府によって接収され、明治2年に兵部省管轄となっていた。外国人教官もフランス人であった。
- (8) 幕府時代から継続の教官は厳格であったが、今日屈するのは将来大いに伸びるところあらんがためと、勉学に励んだという。
- (9) 戊辰戦争の功績で得た賞典録をその資金に充てたが、将来再び軍職につけないことを覚悟してでの決意であったらしい。
- (10) 普墮戦争時に連隊長だった軍人の家に居候して、ドイツ軍制の研究に従事する。私費留学であったことから、現地での生活はかなり苦しかったらしい。
- (11) 帰国後木戸孝允の斡旋で再び陸軍（大尉）に奉職することになり、大村益次郎を継承して徴兵制を勧める山県有朋の派閥に入ることになる。木戸は桂の叔父・中谷正亮とは親しくしていたため、中谷の甥である桂にも目をかけていたという。
- (12) ドイツ軍からさまざまな便宜を受け、ドイツ第三軍団監督部に所属し軍制の実地研究に従事したり、ドイツ人に交じって、地方機関・陸軍省・会計検査院の事務も着手研究した。

- (13) 晩年、桂と孫文はひそかに会談しており、その後の日中について意見を
 交わしている。
- (14) 黄文雄 2012 参照
- (15) 『拓殖大学百年史 学校編 告辞』参照
- (16) 後藤新平については主に越澤明 2011 を参照した。
- (17) 後藤家は学識が高く、祖父と父は私塾を開き、周囲の子弟教育も行っ
 ている。また一族に蘭学者として名高い高野長英がいる。
- (18) 旧熊本藩士。胆沢県大惨事から始まり全国各地の知事を歴任し、地域振
 興に貢献した実務家。後に次女和子は後藤の妻となる。
- (19) 後に海軍兵学校に進み、海軍大臣、総理大臣を務め、二・二六事件で殺
 害される。
- (20) 安場は部下の阿川光裕に後藤を託し、阿川は後藤を書生として自宅に住
 みこませ、親代わりとなって面倒をみた。
- (21) 実は後藤 15 歳の時、上京し書生を目指すも、挫折して帰郷したことがあ
 る。後藤は本当は東京で勉強したかったらしい。最初から政治家を志して
 いたともいう。
- (22) 1875 年 12 月愛知県令に任命された安場に呼び寄せられた。阿川も愛知
 県初代警務部長に任命されている。
- (23) 所謂お雇い外国人であり、オーストリア公使付き医官として来日。
- (24) 1877 年、大阪陸軍臨時病院長となった石黒の下で半年間外科治療の実地
 研究をしている。
- (25) 旧大村藩（現・長崎県大村市）出身のエリート医師。緒方洪庵の塾頭、
 長崎医学伝習所学頭を経、岩倉使節団でドイツ・オランダの医学、衛生行
 政を視察調査している。英語のサニタリーを「衛生」と訳したのも長与専
 斎である。
- (26) 1882 年 4 月、岐阜で自由党総裁板垣退助が刃物で襲われるテロ事件が起
 きるが、後藤は名古屋から岐阜に出向いて適切な治療をおこなった。「板垣
 死すとも自由は死せず」という有名な言葉はこの時の板垣の発言である。
- (27) 人の医者から社会の医者へ、さらには国家の医者を目指す後藤の独特の
 思想と意欲がこの時期に形成されていく。この点は中国の孫文にも似たも
 のがある。
- (28) パルトンは後藤の依頼で、1896 年から 3 年間台湾でも顧問技師として上
 下水道の整備に取り組んでいる。彼は台湾でマラリアと赤痢に感染し、自
 らの命を犠牲にしている。
- (29) 同時期ドイツに留学していた北里柴三郎の師匠、コッホ博士の研究室で

半年間学んでいる。北里とはその後も親交を深める。

- (30) その後 1893 年 10 月、後藤は相馬事件に巻き込まれ、半年間投獄された上、政府高官の身分を失い失業するという挫折に遭う。しかし 1895 年、広島県似島で行った日清戦争の検疫作業を見事やり遂げ、陸軍首脳部児玉源太郎の信任を得、内務省衛生局長に復帰する。
- (31) 後藤自ら「生物学の原則」（ヒラメの目をタイの目にすることはできない）に則ったものであると説明している。
- (32) 北京を訪問し、頤和園で清朝皇帝や西太后と謁見した際は、厚遇を受けたという。
- (33) 『拓殖大学百年史 学校編 告辞』参照
- (34) 新渡戸稲造については主に柴崎由紀 2013 を参照した。
- (35) 『修養』第 9 章参照。大学予備門にいた時は活動家（Active）というあだ名をとったほどに動いていたが、北海道に行ってから是非常な読書好きになり、坊主（Monk）という正反対のあだ名を受けることになった。彼がこの書で学生に勧める読書法に、十人くらいによる読書会があるが、大学のゼミナールはまさにそれに匹敵するだろう。
- (36) 国際連盟事務次長になったのも、後藤と欧州視察に行ったのがきっかけだという。二人の親密ぶりは「…ゆえにわが輩も、この夫婦（後藤夫妻）に対して何の隠すこともしなかった。…他人に語らぬことも、この二人には遠慮なく告げた。かつ秘密を告げてわが輩には何の心配もなかった」という記述からも窺える：『偉人群像』参照。
- (37) 本書は新渡戸が東京帝大農家大学教授を兼任しながら一高校長を務めていたときに『実業之日本』という雑誌に連載した文章をまとめたもので、特に働く階層の青年たちや一般の人々の意識の革新に資さんとして、誰にでもわかるようなやさしい表現で書かれたものだという。
- (38) 晩年、1932 年第一次上海事変の直後、新渡戸は国内の軍閥を批判すると同時に、反日感情を緩和するためアメリカに渡り、日本の立場を訴えるが、満州国建国と時期が重なったこともあって、アメリカの友人から反発を受け、失意の日々だったという。翌年日本が国際連盟脱退を表明、その年の秋カナダで開かれた太平洋問題調査会会議に日本代表団団長として出席するため渡加したが、会議終了後倒れ帰らぬ人となる。
- (39) 『拓殖大学百年史 学校編 告辞』参照
- (40) 特に三人の青年期に共通してみられる、決意したら何を押してでも行うという実行力や様々な挫折を乗り越えていく姿からは、並々ならぬ意志の強さを感じる。新渡戸がいう個としての強さは三人に持ち合わせていた重

要な素質だったかと思う。

参考文献

- 千葉功 2012;『桂太郎——外に帝国主義, 内に立憲主義』中公新書
越澤明 2011;『後藤新平——大震災と帝都復興』ちくま新書
柴崎由紀 2013;『新渡戸稲造ものがたり——真の国際人 江戸, 明治, 大正, 昭和をかけぬける』銀の鈴社
新渡戸稲造 1911/2017;『修養』角川文庫
新渡戸稲造 1931;『偉人群像』実業之日本社
徳富蘇峰 1893/2018;『吉田松陰』岩波文庫
黄文雄 2012;『中学生に教えたい 日本と中国の本当の歴史』徳間書店
『拓殖大学百年史 明治編』2011
『拓殖大学百年史 大正編』2011
『拓殖大学百年史 学校編 告辞』2011
『詳説世界史 B 改訂版』2017, 山川出版社

(原稿受付 2019年6月27日)